信仰・祭祀11

柱跡に土器を納める
ー竪穴住居のマツリー

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

写真１　重複して建て替えられた竪穴住居跡

年の瀬も迫る2006年の師走から約一月半に渡って調査した西京極遺跡で、弥生時代後期前半(約1900～2000年前)の竪穴住居が８棟見つかりました。これらは、同じ場所に何度も連続して建て替えを行なっていることや(写真1)、炉の規模が建物の総面積に対して非常に大きいことなどから、特殊な建物ではないかと注目されました。実は、それに加えて、竪穴住居を壊す時に行なったマツリのあとも見つかっています。

弥生時代や、それ以前の縄文時代から、人間生活と深い関係がある自然や事物などあらゆるものにはカミが宿ると信じられました。それは感謝するものであると同時に畏れるものでもあったようです。そうした信仰の表れと考えられる遺構が各地で見つかっています。今回の西京極遺跡の遺構もそのひとつと考えられます。

竪穴住居の構造　見つかった遺構を紹介する前に、弥生時代の竪穴住居がどのような構造だったのか簡単に説明しておきます。時期や地域、立地条件などによって異なることもあるため一概にはいえませんが、弥生時代後期の竪穴住居は図１のようであったと考えられます。まず地面を掘りくぼめ、

図１　竪穴住居の構造

その土を周りに盛ります。内部は、壁が崩れるのを防ぐため、木の板をめぐらせたり、植物の茎を貼り付けることもあったようです。柱穴を掘って柱を数本立て、屋根を葺きます。中央には、地面を掘り込んで炉がつくられました。

写真２　甕を埋納した柱穴

柱穴は直径22㎝・深さ49㎝で、底に石を並べ、その上に底部を打ち欠いた甕を据える。右上は、10分の１の実測図。右下は、甕発見時の様子。

写真３　器台と高坏を埋納した柱穴

柱穴は直径28㎝・深さ58㎝で、底から25㎝の位置に器台が、さらにその下には高坏が埋められている。

写真４　器台を埋納した柱穴

柱穴は直径35㎝・深さ65㎝で、底から22㎝の位置に器台が埋められている。

西京極遺跡の遺構　今回の調査では竪穴住居の柱穴から完形に近い土器が出土しました。同様の遺構が、３棟の竪穴住居で５箇所見つかっています。柱穴の直径は20～35㎝、深さは45～65㎝あります。土器はいずれも柱穴の中程に柱の直径いっぱいに入っていました。こうした出土状況から見て、これらの土器は柱を抜いた後、つまり竪穴住居を使わなくなった時に意図的に埋められたと考えられます。

埋められていた土器には、壺・甕・高坏・器台がありました。写真２の柱穴では、底に石を並べ、その上に底を打ち欠いた甕を据えていました。写真３の器台はピンク色の発色が鮮明です。他にも、皿の部分を打ち欠いた高坏を埋めた柱穴もあります。

土器を打ち欠く行為は、その土器を実用品ではなくするということから、何らかのマツリに関連するものとされます。マツリの場合、壺や甕などを銭や米、玉などを入れる容器として用いたものもありますが、今回の場合は、土器そのものを納めることに意味があったのでしょう。では、この土器の埋納行為にはどういった意味があるのでしょうか。

古代の遺跡から発見され、現在でも行なわれているマツリがあります。家を建てる前に土地のカミを鎮め許しを得る地鎮祭や、井戸を埋める際に土器を入れたり「息抜き」のために筒を立てる井戸祭祀がその例です。それらから類推すると、建物を壊す時に行なうマツリは、家のカミへの感謝と鎮めの意味があるのかもしれません。

おわりに　マツリに関連すると考えられる遺構は、時代を限らず各地で見つかりますが、その内容まではよくわからないものがほとんどです。今回の遺構についても答えを出すことはできません。しかし、古代の人々の生活を考え、現在にもつながるマツリの意味を考えるひとつの手がかりになる発見といえます。　（柏田　有香）